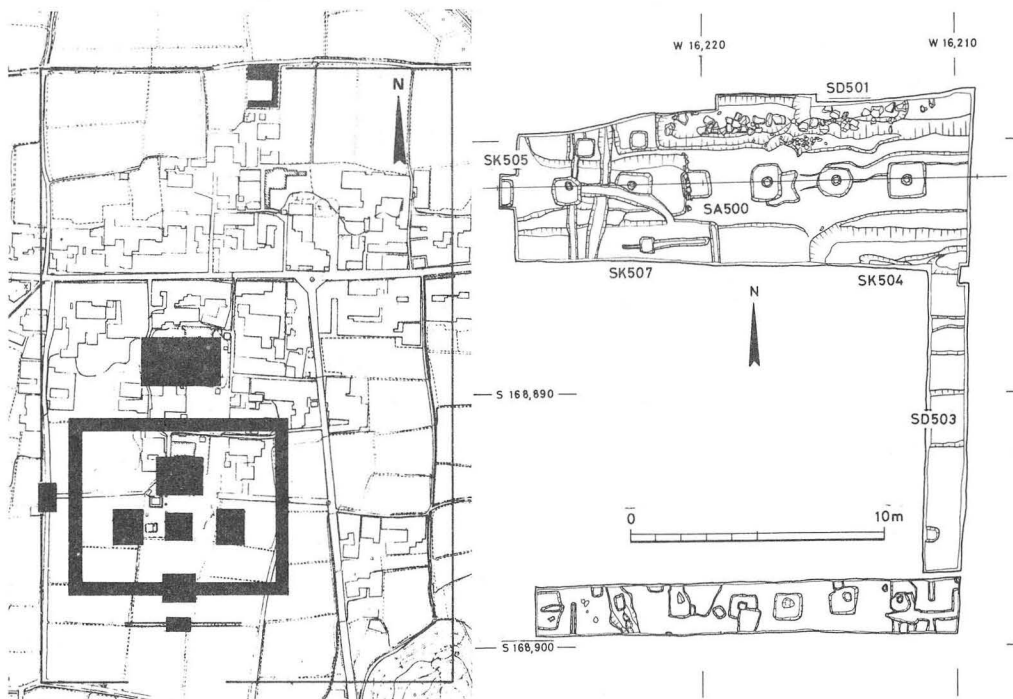


## 飛鳥寺北方の調査

(昭和52年3月～昭和52年4月)

この調査は、住宅新築工事に伴う事前調査として実施したものである。調査地は、飛鳥寺安居院の北方約 220 m、石造物発見地として知られる享石神の東方約 140 mの水田である。検出した遺構には、塀・溝・土壇などと建物の一部かとみられる柱穴がある。

SA 500 は、東西方向に走る掘立一本柱の塀であり、7 間分を検出した。柱間は 2.66 m 等間であり、柱掘形は一辺 1.2 m 前後のほぼ方形を呈し、深さ 0.6 m、中央に径 35 cm 前後の柱痕跡をとどめていた。SA 500 は、方眼方位に対し東で約 50 分北に偏れている。SD 501 は、SA 500 の北に沿う幅約 2.4 m、深さ約 1 m の東西溝である。発掘区西半でとぎれて西にはのびないが、あるいは北折するのかもしれない。溝内には石塊が散乱しており、溝が本来これらの石で護岸されていた

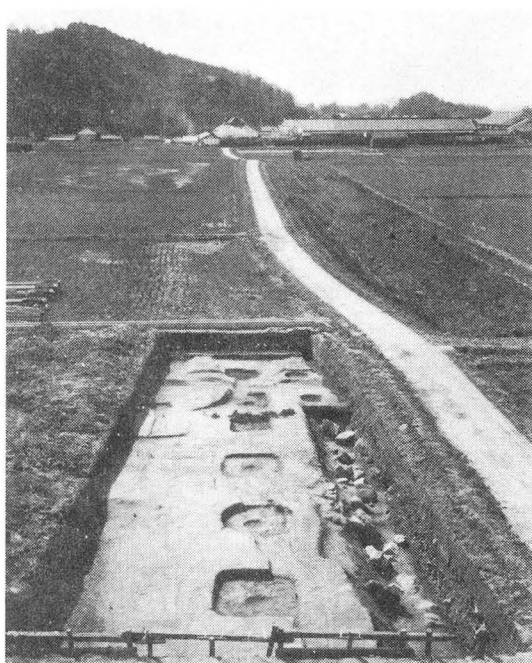


発掘位置図 (1/4000)

遺構実測図 (1/300)

た可能性が強い。SD 503 は、SA 500 の南 9 m にある幅約 2 m の東西溝である。SK 504・507 は、SA 500 と SD 503 の間に掘られた浅い土壌で、瓦片が埋めこまれていた。SK 505 は、SA 500 と重複して掘られた後世の土壌で東端には石列がある。SA 500 の南 17 m 付近では、点在する柱穴群を検出したが、発掘区が狭く今回の調査では遺構の詳細を知ることができない。

溝 SD 501 からは、炭化物に混って多量の瓦や土器が出土した。軒丸瓦



調査地全景（東から）

では飛鳥寺創建瓦のうち、中房周縁の圈線が突出する単弁10弁蓮華文軒丸瓦（報告 PL.65-4）が約 7 割を占め、ついで奈良時代に属する複弁 8 弁素文縁軒丸瓦（報告の XIV 型式）が目立つ。軒平瓦は少なく、他に斜格子文を篋描した埴が少量出土した。土器では土師器・須恵器とともに粗製土器が多量に出土した。土器の大半は奈良時代後半に属し、溝の埋没時期をうかがうことができる。

以上のように、塀 SA 500 と SD 501 は位置関係や出土瓦などからみて飛鳥寺の北を画する施設と考えられる。塀 SA 500 と飛鳥寺南門との心々距離は約 293 m、南門外方の石敷広場までの間は約 324 m を測る。飛鳥寺の寺域は、従来中心伽藍中軸線を西 3 分の 1 におき、石敷広場を南限とする 2 町四方を想定している。今回の調査結果からすると塀 SA 500 との間がちょうど 3 町分に相当するから、寺域は北へ 1 町拡がり南北 3 町を占めていた可能性が強くなった。また今回の発掘区西端付近は、東西 2 町で想定した寺域の中軸線上にあたる。調査によると、溝 SD 501 は塀 SA 500 に沿ってそのまま西へのびず途中で止まっており、この部分以西に寺域の北へ開く門の存在が想定できる。発掘区の関係で十分な結論を得られなかったが、その蓋然性は高いといえよう。